

## atiprasaṅga 系譜ノート

原 田 和 宗

0. 序 最終期の仏教論理学者 Mokṣākaragupta (十一・二世紀 A. D.) は *Tar-kabhāṣā* III で「これら（三種の能証の誤り）だけを指摘することが論駁であるならば、〈無益な能証〉〈効力のない能証〉〈過大適用〉等（の誤り）はどこに含まれるのか。」と設問し、最後の〈過大適用〉(atiprasaṅga 太過失)について、

そして、〈過大適用〉は〈不確定（能証）〉に含ませるべきである。所証の属性をふみ越えて異類例とも結びついてしまうからである。(Iyengar [1952] ed. p. 49<sup>11-12</sup>).

と解答している。後代のどの論理学書にも多用されていながら、atiprasaṅga の過失は長い間、論理学的な定義付けや、定式化を減多に施されることがなかった。Navya-Nyāya の時代に至って、ativyāpti の同義語として漸く定着を見たかのようである (Cf. *Nyāyakośa*, Jhalakīkar [1978] ed. p. 7.)。かかる経緯から推測できるのは、atiprasaṅga が元來論理学的伝統 (Vāda と Pramāṇa の両伝統を区別しないでおく) に属する technical term なのではなく、他の伝統に由来するものだったのではないか、ということであろう。事実、*Carakasamhitā* (Vādamar-yādapadāni), *Mīmāṃsāsūtra*, *Vaiśeṣikasātra*, *Nyāyasūtra*, °-bhāṣya, Sāṃkhya の古学匠の諸断片 (以上、論理学書を含む古代の Sūtra 類) の中は勿論のこと、Nāgārjuna の所謂 Pañcayuktikāya と *Upāyahṛdaya* (以上、反論理学書), *Yogācārabhāmi*, *Abhidharmasamuccaya*, °-bhāṣya, *Tarkaśāstra*, *Vadavidhi* (断片) (以上、仏教討論術の文献) のどこにもその term を見出せないのである。劈頭に紹介した Mokṣākaragupta による扱いは、この異質の term を論理学の体系中に融合せんとする先駆的な試みの一つといえよう。

本稿の目的は、atiprasaṅga が論理学書に導入されるに至った系譜をその必要最少限度の用例から大雑把に辿り、かかる系譜中に占める Vasubandhu と Dig-nāga の重要性を指摘することにある。

I. Vt-MBh インドの学術書における atiprasaṅga の最初の用例と覚しきものは、文法家 Kātyāyana (250 B. C.) にまで遡りうる。その一例は、*Pāṇinīśāstra* VI. 1. 66 : lopo vyor vali 「〔語幹末の子音〕v・y の省略がおこるのは、val (y 以外の子音) 〔で始まる接尾辞〕が〔それに後続する〕場合である。」に対する *Varttika*

3: *atiprasaṅgo vrascādiṣu* (Kielhorn [1973<sup>3</sup>] ed. p. 44<sup>11</sup>: 「[v の省略が] vrasca (〈√vrasca 伐採する〉等 [の語幹] に対して〈過大適用〉されてしまう。)) として登場する。これには勿論 Patañjali (150 B. C.) による註解がある。

vrascādiṣu *catiprasaṅgo bhavati. ihāpi prapnoti. vrascanaḥ vrihiḥ vrasna iti. upadeśasāmartyād vrascādiṣu lopo na bhaviṣyati. (Mahābhāṣya. Ibid. p. 44<sup>12-13</sup>)*

【反論】しかし、vrasca 等に対して〈過大適用〉がおこる。「vrascanaḥ」(伐採)「vrihiḥ」(米)「vrasnaḥ」(傷)といったかかる場合にも[v が省略されて、「rascanaḥ」「rihiḥ」「rasnaḥ」といった不当な語形が]帰着する。【答論】[Paṭha 類の]教示能力のおかげで vrasca 等に対する[v の]省略はおこらないだろう。

Kātyāyana による atiprasaṅga の使用はこの他に少なくとも十四例を数え、Patañjali の許では二十例近くに増加しているから、文法学的議論を進める上でそれが有効な *technic* として駆使されていたことは紛れもない。

atiprasaṅga が元来文法学的伝統に根差す点を確認できた以上、我々は次に、論理学書に目を転じよう。

II. PS-PrBh・NV・NC・YD atiprasaṅga を初めて導入した論理学書は、様々な情況(後述)から判断して、仏教論理学派の祖 Dignāga (480-540 A. D.) の *Pramāṇasamuccaya* であったと見てよい。用例を一つ掲げておく。

nanu cāvypadeśyatvādivacanaṃ tasya jñānasya svarūpapradarśanāyeti cet, na, pratyakṣalakṣaṇasyābhidheyatvāt, asya cendriyārthasannikarṣeṇaiva siddheḥ, jñānasvarūpasya ca pradarśyatve 'tiprasaṅgo guṇatvadra-vyānārambhakatvaniṣkriyatvākāśādyaviṣayatvasyāpi pradarśyatvāt. (*Vṛtti* ad PS I Naiyāyikapratyakṣaparīkṣā k. lab. Jambuvijaya [1961] reconst. p. 210<sup>7-10</sup> の一部を修正。)

【反論】〈言語表現できないこと〉等の言葉[を〈知覚〉定義の中に加えたのは、その知の自己本質を枚挙する為である。【答論】否、〈知覚〉の特質(定義)[だけ]が陳述されるべきであるから。そして、こ(の特質)は[君達 Nyāya 学派にとっては]〈感官と対象との接触〉[という定義項]だけで[十分]認められるからである。しかし、知の自己本質が枚挙されて構わないのだとすれば、〈過大適用〉(ha can thal bar ḥgyur)である。[その知が]〈性質であること〉〈実体を構成しないこと〉〈無作用であること〉〈虚空(=推理だけの対象)等を対象としないこと〉すらも[無用に]枚挙されねばならないからである。(Hattori [1968] ed. Kanakavarman 訳 p. 193<sup>23-26</sup>)

Dignāga による atiprasaṅga の使用は、その用途にふさわしく、PS の諸章後段の敵対学説批判の節に集中している。自学説を述べる前段には現われない。

仏教以外のインド哲学諸派は、Dignāga の出現後、彼 (及び Dharmakīrti) の論理学説の影響を免れなかったが、諸派による atiprasaṅga の採用が悉く post-Dignāga 期の諸作品に限られている事実も、それと符号する点で興味深い。

1. Praśastapāda (550-600 A. D. Vaiśeṣika)

gamyamānārthatvād iti cen na, *atiprasaṅgāt*. tathā hi pratijñānantaraṃ hetumātrābhīdhānaṃ kartavyaṃ viduṣāṃ anvayavyatirekasmaraṇāt tadarthāvagatir bhaviṣyattī. (*Praśastapadabhaṣya*. Nārāyaṇa Mīśra [1960] ed. pp. 201<sup>6</sup>-202<sup>1-2</sup>).

2. Uddyotakara (550-610 A. D. Naiyayika)

yena vākyena samānaśrutyānekānekārtho gamyate tatr*atiprasaktāv atiprasaṅganirākaraṇārtham* avadhāraṇam. (*Nyāyavārttika* ad NS I. 1 33. Nyāya-Tarkatīrtha [1936] ed. pp. 273<sup>13-15</sup>-274<sup>1-2</sup>).

3. Mallavādin (六世紀 A. D. Jaina)

etena *sāmānyāntarabhedārīhāḥ svasāmānyavirodhinaḥ* [Pra. Samu. 5/28] ityādi sarvaṃ pratyuktārtham ity alam *atiprasaṅgena*. (*Dvādasāra Nayacakra*. Jambuvijaya [1976] ed. p. 650<sup>1-2</sup>).

4. *Yuktīdīpikā* の作者 (七世紀? A. D. Sāṃkhya)

evamprakārā anye 'pi draṣṭavyāḥ. radyathā, utsargo 'pavādo 'tīdeśa ityādiḥ……*atiprasaṅgas* tu prakṛtaṃ tirodadhāttī nivartyate. (Pandeya [1967] ed. p. 5<sup>16-17, 20</sup>).

以上の論理学書はいずれも Dignāga 学説を直接的・間接的に批判するものばかりであり、従って、atiprasaṅga の採用に際して Dignāga に影響されたとしてよからう (但し、Kumārila の *Ślokaṅkārttika* における用例の有・無は未確認)。

III. AK-PS PS に使用された atiprasaṅga を MBh からの直接借用とする想定は、無理ではないにせよ、論理学書への atiprasaṅga 導入の口火を Dignāga だけが切った点を申し分けなく説明するものではない。彼以前の論理学者達が MBh のその用例に無知だった筈はないからである。Dignāga にそうさせただけの特別な背景があったのではないか。また MBh 以降数世紀の間、atiprasaṅga が他の学術書に全然使用されなかった筈もなく、そういった使用の系譜が MBh と PS との長い間隙を橋渡ししてくれている。

その系譜を *MBh* 以降の文法学派に求めるのが手近であるが、*Dignāga* の時代までの作品は殆ど現存しない。しかも、*Dignāga* に対する顕著な影響で知られる *Bhartṛhari* (450-510 A. D.) の *Vakyaṭpadiya* の中に *atiprasaṅga* は見出せない。*MBh* に対する *Bhartṛhari* の *Dīpika* (筆者未入手・未見) はその term への言及を当然含んでいたと思われるが、彼によって壮大な言語哲学体系が *VP* で構築されんとしたとき、*atiprasaṅga* という *technic* は無視された訳である。*Bhartṛhari* が *Dignāga* にそれを橋渡ししたとは考えられない。それに反して、*atiprasaṅga* の効果的な使用で注目すべき現存 *Skt.* 文献は、同じく *Dignāga* への影響力の強い *Vasubandhu* (400-480 A. D.) の *Abhidharmakośa* である。

tat tarhy etad anyatroktam iha punar vaktavyam. na vaktavyam. katham anucyamānaṃ gamyate. yuktitaḥ ..... *atiprasaṅga* evaṃ prāpnoti. yāvad yuktyā saṃbhavati tāvad anuktaṃ gamyata iti. tasmān na bhavaty ayaṃ parihāraḥ. (*Bhaṣya* ad *AK* III k. 27. Pradan [1975<sup>2</sup>] ed. p. 135<sup>19-24</sup>).

[*Vasubandhu*:] そうすると、[『縁起経』に対する論難に解答すべく君が援用した]そ(の教説)は他(の諸経典)に説かれるだけでなく、更に当該(の『縁起経』)にも説かれていてしかるべきである。[しかし、説かれていない。][*Srīlāta*:] 説かれる必要はない。[*Vasu*.:] 説かれないうまで、どうやって理解されようか。[*Srī*.:] 理論によって、である。……(中略)……[*Vasu*.:] <過大適用>が以下の如く帰着する。——理論的に可能である限りのあらゆる(教説)が[当該経典に]説かれていなくて[も]理解される、という様である。従って、これは解答にならない。

*Vasubandhu* は、大小両乘に渉る沢山の著作を残したにも拘らず、*atiprasaṅga* を何故か *AK* (の III, VI, VIII の三章) にしか使用しない。*AK* と同じ経量部的立場に立つ時点で *atiprasaṅga* が見られてよい彼の論理学書 *VV* の諸断片にすら発見できない。*VV* を模範にして作成された *Dignāga* の *Nyāyamukha* の中にも見当たらないという事実は、*VV* の散失部分にそれが存在した可能性をほぼ否定するに足る。このことは、再び論理学書内の *atiprasaṅga* 導入の功績を *Dignāga* の *PS* に帰する傍ら、論理的伝統(*PS*)にそれを直接手渡したのは、異質の阿毘達磨の伝統、即ち、*AK* であることを我々に確信させてくれる。

#### VI. *MBh-AMV ?-AK* (紙数の都合で本文省略)。

付記：資料収集に際し、多くの諸先生や図書館職員の方々にお世話になりました。お詫び且つお礼申し上げます。

<キーワード> *atiprasaṅga*, *Kātyāyana*, *Patañjali*, *Vasubandhu*, *Dignāga*.

(高野山大学大学院)